
ザリガニ

鄭文ういな

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザリガニ

【Nコード】

N3362Y

【作者名】

鄭文ういな

【あらすじ】

幼いころの記憶というものは、些細なことでふいに蘇ってくるもの。あのころは確か、二階建てのアパートに住んでいました——そんな、どこぞやの者の思い出。

五才か六才のころのことだ。同じアパートの友達が、井の頭公園からザリガニをつかまえてきた。友達はザリガニを私に見せ、一緒に育てようと言ってきた。

風呂場の桶に水を入れ、その中にコップを入れ、そしてザリガニを入れた。大きなハサミをちらつかせながら、水の中で横になったコップを、ザリガニは根城にしていた。狭いコップに自ら入ろうとする様子を、当時の私は不思議に思ったことだろう。あるいは、ザリガニの姿そのものに疑問を感じていたのかもしれない。

エサを与えなければならぬと、ふと思った。アパートの二階にある自分の家へ駆け入り、何かエサになるものがないか探した。すぐに大きな貝を見つけた。料理用の金網の上に、美味しそうに焼かれた貝があったのだ。私はこっそりそれを持ち出し、細かくちぎって桶の中に入れた。だが、ザリガニは火の通ったその貝を、食べようとはしなかった。ただただ水が濁っていくばかり。そうしてあつけなく、透き通っていない水のなかで、ザリガニは死んでしまった。先程まで動いていたものが、何をしても動かなくなってしまうていた。それを悲しく思ったのかどうかは、記憶に残っていない。

ちなみに、その後母に叱られた。祝い事のために買った値の張る貝が、ザリガニと共に水に浮かんでいたのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3362y/>

ザリガニ

2011年11月8日01時07分発行